

十 赤裸で参る彌陀の國

蜷川新左衛門親當と云ふ武士、常に禪に耽り、座禪三昧に日を送つて居たが、名にし負ふ一休禪師の卓絶せる氣概を喜び、導師とたのみ求道しやうと、或時禪師のお寺、紫野の大徳寺を訪ひ、扉を打ち叩く。一休立ち出でて「何者ぞ」。「いや苦しうも候はず、佛法修行の大俗参りて候」とやつた。すると一休「汝は何處の人でござる」。「和尚と同所」。「さらば國には何事もござらぬか」。「さればござる、鴉はかあく、雀はちうく」。「茲はいづこと知りやるか」。「紫に染たる野邊」。「いかんとして染けるや」。「尾花・朝顔・萩・紫苑」。「散りての後は如何」ときた。「それは宮城野が原」と受ける。「原には何事か侍る」ときり込む。「水は流れて沈々、風は吹いて颯々」とされる。流石の一休も、此奴一癖あると見込んだか、「善哉々々、お通りなされ」と案内して座敷へ通した。

庭景色のよい離座敷へ通して、茶を衣服進めた一休。茶請も出さずに「何をがな参らせたくは思へど、達磨宗にて一物もなし」とやつた。親當すかさず「一物もなきを賜はる心こそ、本來空の妙味なりけり」とやりかへす。それから四方山の話もあつた序に、「邪正一如とは如何心得べきか」と問出し、「其方歌好きなれば歌で答へやう」と云ひ出したのが、「生れては死ぬるなりおしなべて、釋迦も達磨も猫も杓子も」。「空即是色とはいかん」。「白露のおのが姿を其まゝに、紅葉に置けば紅の玉」。「然らば色即是空の意は前の歌の反對に心得べくござるか」。「花を見よ色香も共に散り果て、心なくとも春は來にけり」。「佛法とは如何なるものと、心得候べきか」。「佛法はなべのさかやき石の髭、繪にある竹のともずれの音」。「世法とは如何に」。「世の中は食うて稼いで寝て起きて、さて其あと死ぬるばかりぞ」。

一々くかやう斯様に歌を以て立續けて答へられるので、親當も打驚き、愈我師とたのむのは和尚の外にないと思つたが、尙一つ不意をねらつて肝を潰して呉れんと、親當「重々の御教示、誠に有難く存ずる、此後とも尙御高教を垂れ給はん事を」と辭し去つたが、枝折戸の側から急に引返し、「イヤ忘れたりく、大事の物を忘れたり、佛には如何して成るもので御座るぞ」と不意に問ひかけた。一休もさるもの。其まゝ其處へ踏ん外り返り、大の字になつて目も口も張開け、「恚うして佛にはなる者ぞ」。この咄嗟の妙作用に、親當二の句がつけず「流石は大活禪師」と九拜して辭し去つたとか。

「佛には云何してなりますぞ」。踏ん外り返つて「恚うしてなるのだぞ」と面白ではないか。親當この所を何と悟つたか。一休何と示したか。讃岐の庄松は、人に「一念歸命の味ひは？」と聞かれて、阿彌陀如來の御前に寢轉んでみせるのが、常であつたと云ふ。或時、十川村光清寺の本堂にて、子供を守し遊ばせて居ながら、急に兩手をつき、兩足を上にさし延べて、逆立になつて戯れるのを、見付けた講中の人々「アレく同行が輕業をやらかす、妙々」と、笑ひ囁す。庄松ぬからぬ顔で「お前達が地獄へ落ちる眞似ぢや眞似ぢや」と誠める。或時は、三本松の勝覺寺の本堂で、御本尊の眞前に、仰向様に寢轉んで、にくくして居る。友同行の菊松に咎められて、言草が面白い。「親の内ぢや、遠慮には及ばぬく、さう云ふお前は養子であらう」。穿ち得て妙ではありませぬか。

之を彼の俳諧寺一茶の言に聞け。

他力信心、他力信心と一向に他力に力を入れて、頼みこみ候輩は、つひに他力繩に縛られて、自力地獄の炎の中へ、ぼたんと陥り候。其の次に斯る穢き泥凡夫を、美しき肌になし下されと、阿彌陀佛におし誂へに、あ

つらへ放しにして置いて、はや五體は佛染みになりたるやうに、惡ずまし
たるも、自力の張本人たるべく候。問うて曰く。如何様に心得たらんに
は、御流義に叶ひはんべりなん。答へていはく。別に小むづかしき仔細は
不存候。たゞ自力他力何のかのいふ、あくたもくたを、さらりとちくら
の沖へ流して、さて後世の大事は、其身を如來の御前に投出して、地獄な
りとも極樂なりとも、あなた様の御はからひ次第、遊ばされ下されませと
御頼み申すばかりなり。斯くの如く決定しての上には、南無阿彌陀佛とい
ふ口の下より、欲の網をはる野に、手長蜘蛛の行をして人目をかすめ、世
渡る雁のかりそめにも、我田へ水を引く盗み心、ゆめくもつべからず。
然る時は強ち作り聲して念佛申すには及ばず、願はずとても佛は守りたま
ふべし。是即ち當流の守心とは申すなり。あなかしこく

ともかくもあなたまかせの年の暮

五十七齡 一

茶

文政二年十二月二十九日